

ホメーロス輪読会の四十年

一九六五年のフランス文学科の創設により明治学院大学文学部は英文科だけの単科状態から複数学科となり、一九九〇年には芸術学科も加わった。六五年から始まる十数年は変革の時だった。詩人西脇順三郎が慶應義塾大学から本学文学部の講師となり、慶應の法学部からは新倉俊一が本学大学院の英文学専攻に転入学。のち新倉は「西脇全詩隠喩集成」を完成させた。西脇は詩経について語る「談話会」を小教室で開いていた。

東西の古典語に堪能、三千年前から詠唱されたホメーロスの言語に詳しい西脇は、中国語と古代ギリシャ語に音声的関係を確信していたようである。この考えは中国語の専門家を戸惑わせるものだったが、本学の言語文化研究所はこの西脇の比較作業から生まれている。三万枚に及ぶ詩人の比較原稿はコピー製本され残った数千枚はデジタル化され、両方とも現在閲覧可能である。並行して研究所で行った荒木英世講師の「現代ギリシャ語講座」には若い村上春樹が通った。

西脇没の翌年（一九八三）三月、国文学者満田郁夫の旗振りで開始されたホメーロス輪読会は、本年（二〇二三年）六月、通算千百回を祝う予定である。

本学名誉教授 工藤進 (web: xerxes5301)